居候狐

雪原　奈古

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
居候狐

【Ｎコード】
Ｎ１９０６Ｃ

【作者名】
雪原　奈古

【あらすじ】
悲惨な子供時代を過ごした神代陣は、ある日一匹の狐を預かることになってしまった！？隣人や上司、妖怪たちが織り成すファンタジー系ラブコメディ！！０８／０３／０８より、『天使は悪魔にキスをする』を公開中。出来れば、読みに来て下さい。

プロローグ　白泉大での仕事（前書き）

コメディの割にはアクションっぽいです

プロローグ　白泉大での仕事

夕暮れ、神代陣（かみしろじん）は人気（ひとけ）のない廊下を徘徊（はいかい）し、何かを探しているようだ。

　ある教室の前までいくと

「ここか・・・・」

戸を一気に開けた。中にいたのは女子生徒が２つ並べた机を囲むように座っていた。

女子生徒たちは、陣に気がついて手の動き一瞬止めたがすぐに目を閉じ、何か呟く。

すると、右手が滑るように机の上を動く。なんとも不気味な光景だ。

　陣は何も見なかったように少女の右手を押さえつけた。

陣のいる白泉＞私立白空春泉大学＜（しりつしらぞらいずみだいがく）大は国内有数の大学である。

　大学といいながらも、最新設備と市を買い取ったと噂される広大な敷地に僅か二千人程度しかいない。

今いる教室は中央校舎から離れた東校舎のある一室である。

元々、生徒に貸し出す部屋のため椅子や机が隅に片付けられていたはずだ。　今は引っ張り出された机の上に紙と翡翠を握りしめた白い肌をした綺麗な右手が置かれている。

陣はアルファベットの書かれている紙を見つめ、

「コックリさんか～。やるヒトなんてまだいるんだ～。しかも、簡易降霊術に翡翠で霊力を集めて、霊を自身の体質で地上にとどめるなんてスゴい！」

明らかに場違いな発言しながらも目だけは、真剣なままだった。

陣はアルファベットの書かれている紙の上に小さな紙を置く。

その紙には、八角形をずらして重ねたような円が書いてある。

「封域・壱拾六景」

陣はそう呟くと、刀を持っていた。反りのない長さ百五十センチ位の細身の刀だった。

空いている椅子に足をかけると刀で紙を刺した。すると、

「ギャーーーーーー」

部屋いっぱいに響き渡るつんざくような声だった　　刀は崩れかけたヒトを刺していた。

ヒトは片膝から分解され光ながら、紙に染みこんでいった。

一通り終わると陣は紙に手を伸ばした。そこには　　「封」と書かれていた。

満足げにそれを見ると、陣は懐にしまい、

気絶した少女たちに声かけるため立ち上がった。

第一話　始まりの日（前書き）

今回は登場人物たちの過去とこの小説の原点について書かれいます。
最後までお読みください。

第一話　　始まりの日

ピ、ピ、ピ、ピピピピーっ。

神代陣は手探りで携帯電話を探す。

元々朝が弱い陣は、携帯のアラームを消さなくても寝ている自信がある。

この行動はあくまでも近隣住民のためであり自分はどうでもいいのだ。

適当に朝食を食べ、リビングでうつらうつらしていると、不意に携帯が鳴った。

今時珍しく、着メロではなく内蔵の電話の音っぽいヤツだ。

「もしもし…。切るよ…」嫌そうな声で答える。

「ダメですよ！

ジン君だって今月、もうそろそろ危ないのはわかってるわ♪」明らかに早朝にしては、ハイテンションだが耳元に残る美しい声をしている。

「何で知ってんですか？…。明らかに国家権力の横暴でしょ！！…」

ソファでうなだれる陣。

「これでも内閣府直属の非公式機関だからね！

国内事情ぐらいだったら網羅できるよ。」

と、天宮玲奈（あまみやれいな）は軽々口にしてしまうあたりから、陣を信頼していることがわかる。

「はぁ、二年前に、会ったときは純粋で可愛くて守って、的な感じ

だったのにね。どうしてひねくれちゃったんだろう…。」

最後はため息に近い。

「あっあの時は親に捨てられて誰にも頼れなったし、それにかわいいはないじゃないですか！」

うろたえる陣。

事実、高三の冬に家から追い出された。

理由は簡単。幽霊や見てはいけないものを感じて、触ることができたからだ。

小さかった陣にとっては当たり前のことで大人の目には異常にしか映らなかった。

最初は無関心・子供の戯言としか思わなかったが、親は親で不安に感じたらしい。

脳外科に精神科、少しでも良い医者がいると聴けば、病院を変える毎日だった。

中学校に上がると、今度はいじめにあう。

一人で話してたり、壁を見ていて、異常に見えたんだろう。

当時は髪も長かったし、母親に見放されて、父親はガンで入院、生きることを諦めて、たぶん暗かったんだろうな…。

高校に入って、いじめは無くなっても、友達はできることなく無駄な時間を過ごすだけだった。

そして、最悪な事態は高三の冬に起きた。

進路も決まらす〝、家に帰ってもやることのない陣はベッドに寝ていた。
かすかに眠気が感じたとき、視界に入ったのは父親の姿だった。
青白い顔にパジャマ姿の父は、
「今まですすまなかった。許してくれ」
そう言うと消えた。直後、帰宅する母親。
久しぶりかもしれない　自分から話しかけた。
夕食を作りながら聞いているかもわからない母親に先程のことを説明する。
しかし、母親はまたはじまったと、ばかりに無言で用意をする。
一本の電話がかかってきた。
父の死を伝える一本だった。
突然、急変してあっけない死だった。母親は陣を見るなり、
「呪ったのね…私の夫を殺したのね。」
持っていた包丁をかざして向かってきた。
刺されそうになりなか〝も死に物狂いで家を飛びだした。
無我夢中で走った。
元々運動神経は悪くなかったこともあり、気づけば町外れまできていた。
そこで霊に取り憑かれそうになったとき助けてくれたのが天宮玲奈だった。
心身ともに衰弱した陣を機関で一時的に保護し、白泉大を勧めたのも玲奈だった。　その後、母親は心を病んで失踪。

残された妹は親戚に引き取られ、引き取り手がない自分に預かると言ってくれたのも玲奈だった。
そのおかげで、出来たばかりの白泉大に向けて頑張れたのだ。
白泉大は合格率も低く、人気もあった。
それでも、自分を助け出してくれた玲奈に少しでも、喜んでほしい。
必死に勉強したかいもあり、白泉大に受かった陣はアパートを借り、一人暮らしをはじめた。これ以上玲奈に迷惑をかけたくないからだ。

それでも玲奈は月に何度か連絡してくる。

「で今日は、何ですか？
どうせ、バイトとかいって機関の雑用やらせるきでしょう？
実際、生活は助かってますけどね。」

「雑用だなんて……。
これでも、大事な仕事だ。
除霊や妖怪討伐に呪布の回収、あくまでも一般人のためにやっていることなんだよ。
まぁ、今回は個人レベルだけどね。今ジン君の通う、白泉大で降霊術が行われているらしい
元はヨーロッパの遺跡サークルだったんだが、オカルト分野に突出しすぎて今じゃ生贄捧げて降霊術しようとしているらしいわね。
依頼人は大学側だし、後はヨロシク、んじゃ！」
と、玲奈はいきなり電話を切った。

「玲奈サーン、れ、い、な、サーン……。

あれ、本当に切ったよあの人」
ひとまず、携帯をしまうと身支度を整えた。寝癖は残っているものの、茶髪気味の髪とハーフを思わせる顔立ちのおかげで、逆に引き立っている。

まあ、本人は気づいていないが。

玄関のドア閉めようとしたとき、隣のドアが開いた
「オハヨ……。」
彼女はそれだけを言うと立ち去ろうとした
「待って、朝比奈さん一緒に行かないか？」

朝比奈未琴
陣と同じ白泉大生で、陣は気づいてないが幼なじみだ。未琴は幽霊や妖怪を全く信じていなくて
逆に陣のことを奇異な目で見なかったのかもしれない。

「ジン君はまだアレ、やっているの……」

「アレって、バイトのことか？
実際、生活費とかきついし」

陣は当然、仕送りや貯金は一切ない。
出来る限りは自分でやると決めたからだ。

（玲奈は何度か援助を申し出たが陣が却下したので機関の仕事の一部を紹介している。）
「じゃあ、ウチに食べにくればいいじゃん……
わたし、一人暮らしだから平気だし……」

と、言って
未琴はもじもじし始めた。彼女は陣が目的でアパートを借りたのに

親戚が集まった葬式の翌日、陣の引き取り手の相談が行われた。

未琴は両親も出席するため、手伝いに呼ばれていた
未琴の両親は陣の父親と旧知の仲で、一応引き取り手の一人として来たものの、養子を養うほど裕福でないため結果を確認しに来たに近い。
親戚も幽霊の見える陣をあまりよく思っていないらしい

遺産相続や押し付けでいっこうに決まらない
未琴は欲望丸出しの親戚に呆れ果てながらも内心、期待していた。

（もしかしたら、父さんがジン君を引き取ってくれるかもしれない。一緒に住むこともできるし、最後のチャンス。）

その時だった
居間の戸が全開になった
出てきたのは二十歳の綺麗な女性

「神代陣はわたしが預かるわ。
それで、文句は無いでしょ！」
啖呵を切ると一同を見回す。
当然と言っちゃ、当然だがみんな驚きを隠せない。やがて叔父だろうか声を荒げる。

「お、お前は誰だ！

どうせ遺産目当てだろう。」

ジン君の叔父は突然はいってきた女性を罵った。
スーツを着こなす女性は肩までの髪をかきあげ、アイドル顔負けの笑顔で
「わたしは天宮玲奈。
別にお金はいらないわ
わたしが欲しいのはジンだけよ！」

今度はあ然とする親戚一同。
叔父とたぶん母方の代表が密談を始めたがすぐに……

「いいだろう。陣を連れていけ
その代わり、遺産はこちらで分けさせてもらう」
天宮さんはニッコリ笑うと出ていこうとした

わたしは立ち上がり、玄関で天宮さんを呼び止めた。

「ジン君は、ジン君は、これからどうなるんですか？わかる限り教えて下さい！」

天宮さんはじっとわたしの顔をみると微笑み、

「ジンは白泉大に通うことになっている。今なら間に合うわよ」

ドアが閉まる
直ぐに両親に相談した
（もちろん、陣のことは黙っている）

高校の推薦で入学の決まりアパートを借りることにし、いくつかの

場所を回った
最後の物件
今までで、家賃が高く、大学に一番近い。階段を登り三階が見えた
そのとき一瞬だがジン君が居たような気がした
すぐにドアが閉まり確認はできなかったがジン君だ
管理人さんが部屋を案内してくれる。
今さっき閉まったドアを見ると

＞神代陣＜

胸が痛かった
会いたくて、会いたくて　しょうがなかった人は目の前にいる

そして今も……。
「何、考えてるの？
ひとまず、大学に行こっか！
講義に遅れたくないし」
陣は歩き出していた。
後ろから追いかける未琴はセミロングの髪揺らし
「待ってよ」

陣は見ていないがとても良い笑顔をしている。

彼女にとっては一緒にいるだけで幸せなのかもしれない。

玲奈に言われた仕事も終わった。
（プロローグ参照）
未琴は先に帰ったらしい。陣は一人で道をとぼとぼ歩いていると、

（ザワッ）

立ち込める空気が変わった。
陣は走り出した。
機関である程度の訓練を受けているため、霊力を使える。
しかし、この霊圧は陣の操れる域を越えている。

目の前に何かが見えた
黄色から黄金に近いモノは倒れているらしい。

（…あれは…。）
一気に近づく。

「…き、狐…？」

そこにいたのはぐったりした霊狐だった。

第二話　キツネと隣人の不幸な幸福（前書き）

祝！！アクセス数　５００件突破！

やっとコメディっぽくなってきました。

更新が不安定でスミマセン。引き続き、ご贔屓お願いします

第二話　キツネと隣人の不幸な幸福

キツネは陣が近づいても一向に動こうとしない

（妙なモノ見つけちゃったな～。
ほっといたら、玲奈さんどやされるし…。）

髪の毛を指に巻きつけながらキツネに手をさしのべた。
陣自身は気づいていないが、何か困ったことになると髪の毛をいじる
もない

　その動作に異性と一部の男子が目を奪われていることは知る由

「・…！、玲奈さんですか？
神代です。今、衰弱した霊狐を発見したので人を派遣してください。
お願いします」

さすがに朝のようにはならない。

陣は必要事項だけを伝えると携帯に耳を傾ける。
「ジンちゃ～ん？げんきぃ～！。
今から部下と飲みに行くのぉ～♪
あんたも、こっち来なさいよぉ～。
今なら、わたしを貸し切りできるわよぉ～！」

などと、意味不明な発言が目立つ命の恩人に対して。

（酔ってんな　、あの野郎。まだ勤務時間だろーし、部下連れまわして、何やってんだか…）

霊狐が放つ力は弱まりはじめた

陣は苛立ちをおさえつつ、きっちり電話対応。

「霊狐はどうしますか？飲んだくれ野郎。
個人的には一般人に被害が出ないうちにあなたと一緒に機関に引き取って欲しいんですけど。」

「ヒドいなぁ～！ジンちゃんはぁ～　。　ヒック
ひとまず、ジンちゃんヒック、のところで預かっといて
明日、土曜だし
　ん～。夕方には何とかするから
　　ヒック、
前に渡した、“破気紙縛り”　まだ残っているでしょ。
　あれ、適当に巻いときゃあ、何とかなるから。

榊（さかき）、次は居酒屋いくぞ。」

電話越しに響き渡る女性の悲鳴、更に大きくなる玲奈さんの声。
電光石火で電話を切る陣

（もう、辞めたい。

このバイト。）

と、ぼやきながらも
キツネを抱き上げた。アパートに向けて歩き出した

（“破気紙縛り”か。
大学で降霊術止めるのにかなりの量使っちゃったんだよなー
余っているといいんだが）

“破気紙縛り”
破気紙自体は霊力を吸収・放出しやすい素材で出来ているため、併用し易い。

前回の大学内の時は玲奈さんから渡された一式を使い込み、節約することができなかった

一見、楽にみえる降霊術の破棄は特殊に織り込んだ破気紙を陣自身の霊力で、霊や精霊を封じ込めるものである
膨大な霊力にある程度の破気紙が必要だ

陣は何事もないように動けるが一般人だったら昏倒してしまう程だ。

アパートの玄関についた
現在午後7時。

辺りは完全に暗くなり、陣も霊狐をどうにかしたいため、鍵を探してドタバタしていた

「あれ？ジン君、今日遅かったね！
なにそれ……もしかしてキツネ？
見せて見せて！」

ドアを開けて出てきたのは隣部屋の未琴だった
いくら、陣だって鍵ぐらいかけて出ていったはずだ

しかし、陣を部屋に迎えようとするのは朝比奈未琴であり、隣人だ。

「ジン君、固まってないで部屋に入ってよ。
あ、部屋の鍵は合い鍵だから気にしないで」

と素っ気ない答えだ

「あ、合い鍵って朝比奈、どこから手に入れた」
焦る陣。

陣からすれば自分のプライベートな空間は、トイレだけになってしまう。　それに、未琴は普段から陣の部屋を訪ねてくることがある。　食事や買い物など、日常茶飯事である

　しかし、陣は陣で独り暮らしの女性と一緒に……と妙なところに硬い性格なので全て、断っている。

未琴は未琴で陣の性格をわかっているので懲りずに何度も誘っている

「じゃあ～、今後わたしのこと“未琴”って呼んでくれるんなら教えてあげるよ♪」
と、天使も射殺せそうな笑みだ。

「朝比奈、それはちょっと……」しかし、未琴しかし、未琴は更に顔を近づけて

「だから、朝比奈じゃあないってば～♪
未琴って呼べばいいんだから！！」

強気な未琴に陣は諦め、
「み、未琴っ！」

顔を赤らめて俯きながら喋る陣を見て

（ジン君、可愛いなぁー目なんてウルウルしちゃって
頼んだわたしのほうが照れるじゃない！）

ぼけーっと、陣の顔を魅入る未琴

…ハッと気付いて、部屋のほうに歩き出した

「玲奈さんよ、玲奈さん！。
この前、ジン君がいないときに来てね
　ちょうど、部屋に入ろうとしていたから
ジン君は朝からいないって言ったら、一緒にお土産たべない？って。
で、そのときに

“男の独り暮らしだから面倒みてくれない！”
って感じで、鍵を拝借したわけ♪」

笑顔で答える、未琴。

「なぁ～に、笑顔で答えちゃってるのかな未琴サンは！
普通、断んない？」最初は、驚いていた陣だが最後は呆れ顔で聞き返した。
「気にしない。気にしない♪
まっ！ひとまずそのキツネ、手当てしない？
タオル、持ってくるから」

と洗面所ではなく、部屋に向かう未琴。
　陣は基本的にタオルなど小物は部屋のほうにしまっている
そのため、洗面所はものがない。
生活感まるでない。

そんななか、迷わず行く未琴を見て、

（今日が最初じゃないな。）

と肩を落としつつ、狐を運ぶ陣。「それ、包帯とかじゃあないよね？」

1メートルくらいの幅5センチの和紙を見て言う。

「いや、破気紙だけど。一応、霊狐なんだよね、コイツ。

だから暴れだしたら大変だから…」

と、和紙を指でなぞっていく

「どう見ても、ただのキツネでしょ。オレ！オレ！…」

意味分かんないとばかりに、未琴は陣を罵りキツネの耳をいじっている。

陣は未琴のほうを見るとため息をつき、今度は和紙を編み込みはじめた

「でもさー。何で倒れていたんだろうね！

特に外傷もないし

わたしは結構嬉しいんだよね♪」

キツネをいじりながら、陣に寄りかかる

陣は霊力を込めながら、必死にやっているため未琴に気づかない。

そして……

陣が急に立ち上がった。つられて、未琴が体勢を崩す。

「ちょ、ちょっと…」

「未琴、キツネの頭を抱えてこっちにきて。」

言われたようにする未琴。見ると、銀色の紐を持っている

ベルトのように編み込まれ流れる水のようだ

「頭をこっちに向けて、手足を押さえて。」

陣の真剣な表情に…

「ねえ～、それってどういう効果があるの？」

霊や妖怪を全く信じない未琴でさえ、真剣な表情を見て尋ねた

「付けることでね、霊力の放出を抑えることができるんだ。
もちろん、自分より強い相手には効かないんだけどね」

苦笑しながら、キツネに首輪をつけた。すると……

“ガキン”

何か、はじけたような音。

破気紙縛りが返されたのだ。

キツネから霊力が溢れ出し渦巻いて陣と未琴を取り込む
首輪状になっていた破気紙は何カ所も寸断され、バラバラに千切れた。

「み、未琴！」

未琴は2、3メートル離れた所でうずくまり、震えている。

陣は駆け寄ると未琴を壁際まで抱え運ぶ。

未琴が目を覚ました。

「じ、ジン君、アレ！」霊力の渦の中心に白、いや銀の尻尾が見える

陣が運び入れたときは柴犬ぐらいで茶色のキツネだった。

今見るキツネは、グレート・デン並の銀に近い白の体に、

キツネ特有の大きな耳と尻尾。

常識の範疇を超えた生物だった。

陣と未琴は現実に対して対応仕切れず、

目を見開いていることしかできなかった

「ねえ！

フロとメシ。」

「えっ？今なんて……」

女性特有の高い声と場違いなセリフ。それはあのキツネの口から発せられたものだった陣と未琴はある意味固まった。

キツネが喋ったこともそうだが、何より……

（（オヤジクサッ！！
第一声からこれかよ））

と思わないほうがおかしい。

「どっちでもいいから
早くしてーー！！」

声が1オクターブたかくなる。
　そこで未琴が口を開く。

「おフロだったら
用意してありますけど…」

クワッと未琴を見る陣。
「えっ？ありがとう〜！」と部屋を出て行くキツネ
あの巨体なのに全く足音のしなかったところから意外に軽いらしい。

「未琴！何で、フロ沸かしてあるんだ？
俺の部屋に入ったの、初めてじゃないだろう！
まず、何で、ここにいるんだ！！。」

今までため込んでいたものを全て吐きだした。

それに対して
「今日の朝、言ったじゃん。
一緒にご飯食べよっ♪って。
それに玲奈さんにも頼まれているんだから！」

当たり前とばかりに言い放った。

「で、結局どうすればいいの？
　今、おフロ入ってるけど……」

不安そうに、霊狐の出て行った部屋の入口をみていた

「ひとまず、ご飯の準備してきて！
多分、大人しくしているから
　あの霊狐はかなりオヤジっぽいし、口調からして若いキツネ。
特に敵意も無さそうだから要求をのんどいたほうが被害が出ないと
思うよ」

のほほんとソファに腰を下ろす。
（キツネが喋っていることには何もつっこまないんだ……。
　流石は未琴！）

テレビのチャンネルを適当に変えながら、夕飯を待っていると、

「やっぱ！、フロは一番風呂に限るわぁー♪」

オヤジ……じゃねーや、さっきの霊狐が出てきた。
振り返った陣が見たのはバスタオルを巻いた霊狐の姿だった。
　そこには、キツネの姿は無く、一人の少女がたっていた。
銀髪に目鼻のしっかりしている顔にスラッとしたスタイル。
程良く整った体つきをしている。
一見、１７、８の美少女にしか見えないのだが……。
「何で！
　耳と尻尾はそのままなんだよ！！」
流石に、陣もツッコまずにいれない。
「だって～！人の姿じゃないと水切れ悪いからなったんだけど。
あんまり慣れてないから耳とか尻尾とか上手く隠せないのっ！！」
と余程恥ずかしかったんだろう。
顔を赤くして、陣に抱きついた
　陣は、もちろん支えきれずに押し倒された。
“ガタン”
「どうしたの！！
　ジ……ン君？

どうしちゃったんかな～本当にどうしちゃったんかな～？
　　ジン君はオンナに押し倒されているの～？
　　そのオンナ何…？」

未琴は現状を見てそうつぶやいた。
　ジン君に何かあったかもしれない！助けなきゃと思って来たら
この有り様だ。
ジン君はバスタオルを巻いたオンナに抱きつかれている。

ジン君、顔が真っ赤なんですけど。

包丁を持つ右手に殺意を持ったのははじめてかもしれない♪

「ちょ、ちょっと待って未琴！
今説明するから、右手、押さえて、押さえて。」

ジンが這い出ようとするが、
陣の胸に顔をうずめていた霊狐は本能的に抱きしめる力を強くした。

その瞬間、降ってくるテレビ
一瞬で　俺の体から離れるキツネ野郎。

潰された俺。

　意外に意識飛ぶなんてあっけなかった…。

第三話　沙希の素性と些細な攻防戦（前書き）

一週間に一度の更新を目指しています。文章力のない私ですが、続けていきたいので感想をよろしくお願いします。

第三話　沙希の素性と些細な攻防戦

蛍灯光のひかりが眩しい……

「　　う…んっ！
　　あれ…？」

今、いるのはソファの上らしい。毛布がかかっていた

隣に座ってるのは未琴だ

目の前にはTシャツとジーパンの霊狐。何故だか正座をしている

「あっ、ジン君！

目が覚めたんだ。

　今、この女狐をしばいてたの♪」

楽しそうに話す未琴。

そして、自分で作ったんだろう、綺麗に3つに分けられた料理の数々。

　その中から唐揚げを一つ、つまむ

「あっ！……私の唐揚げが……。」
銀髪少女が崩れ落ちた。
　そこの皿を見ると明らかに、
少ないおかずたち…
どうやら、唐揚げと同じ運命を辿ったらしい。

「アンタに反省の色が見られないからでしょ！！
それに、ジン君が目が覚めたんだったら
謝るぐらいしたっていいじゃない！」
陣は思い陣は思い出した。

　テレビの存在を……

自分に投げつけられたテレビを……

「未琴。悪いのは君だと思うよ」
うなだれて言う陣。

　「わたしも同感！」
ここぞとばかりに身を乗り出す、銀髪少女。

「黙りなさい！女狐。
も、もともとはアンタが避けるのが悪いんじゃない！！」
明らかな責任転嫁だが、そこで譲らないのが未琴

しかし……

「ねえ～、見たでしょ？あなたが起きないから
ずっといじめられてたんだよ～。」
そう言いながら、陣に泣きついた
未琴はしまったっ！と思ったらしく引き離そうとしたが…、遅かった。

「うげっ……。」

銀髪少女は陣の首を
がっちり、ホールドするとそのまま押し倒した。
陣は行動を読んでいたらしく、立ち上がって逃げようとした。

（アレ？）

グラっと、立ち上がったが、一歩がでない。
近づいてくる銀髪少女に為す術もなく
肺から息を漏らして押し倒された。

「おまっ、
ちょっ…と離れ……ろ
苦……しい」

頭を叩くと顔を上げる
微かに、涙の後が残っている。
どうやら、本気で泣いていたらしい

「大丈夫！未琴はもういじめないから、ひとまず離れてから話そう。」

小さい子供に言い聞かせるように、
声はとても、優しかった

その光景を目にした未琴はショックをうけていた
陣は嫌がるどころか優しく話しかけたのだ

「未琴。さっきのことは言い過ぎかもしれない
もう少し、コイツに優しくしてくれないか？」

真剣に話す
陣に未琴は……。
「わかった…努力してみる」
しょんぼり、頷いた

銀髪少女をソファの自分の横に座らせると
ゆっくり、食べ始めようとしていた
未琴は向かい側のソファに座らせる

「ねえ私、はし使ったことないんだけど…」
語尾はほとんど聞こえなく、恥ずかしさよりも、情けないと思ったのだろう、明らかに助けを求めている
陣は少し考えると、彼女のはしで唐揚げの一つを摘んだ。

「キミ、名前は？」
「白銀沙希（しろがね・さき）……。」
沙希は顔も上げずに、名前だけ、ポツリと告げた。
「じゃあ、沙希！
顔を上げて」

沙希が顔を上げると、
目の前には陣の手があった。
「沙希、口を開けて」
陣の指示に従い、小さく口を開ける
陣は右手で掴んだ唐揚げを彼女の口に近づけた。
最初は躊躇った沙希だが、欲望には勝てずに
かじりついた。
口の中に広がる唐揚げ特有の肉汁に顔をほころばせる。
気が抜けたのか、沙希の髪の中から、銀色の耳が立ち上がったそんな、
沙希を満足そう見つめる陣
未琴はというと、手にした味噌汁を落としてしまった
しかし、少しも気にせず沙希のほうを見ている
陣は味噌汁の残骸を片付けるため、
ティッシュを片手に未琴に近づいた
運良く未琴にはかかっていないことに安心していると、
上着の端を引っ張られた

「どうしたんだ？未琴」　　未琴は笑顔でさっきまで自分が使ってた箸を差し出し……

「食べさせて♪」

「ハイ？　未琴サン？

まぁ、今日は沙希のこともあったし、少し、疲れたのかな～」

「そ、そんな！

哀れみたいな目で見ないでよ！！

沙希がやってもらったんだよ！

私だっていいじゃん」

少し、涙目で怒っているようだ。

陣は不謹慎ながらも、かわいいと思ったが、

さすがに……

「沙希は狐だからね、

未琴にやるのはさすがにヤバいと思うんだよね。

別に、未琴が……とかじゃなくてね。　僕の立場がなくなるからね」

陣は苦笑しながら弁解した

しかし、未琴は諦めるつもりはないらしい。

「じゃあ～、ちょっとだけ、こっちに来て♪」
体をずらしてソファに隙間をあけると、
座れとばかりに睨んでくる。
大人しく座る陣だが、次の瞬間……。
「あぁーーーーー！！」
沙希が叫んだ。
未琴は、陣を座らせると
頬にキスをした
未琴はニコニコしているが、
陣は顔を真っ赤にして、そそくさと沙希の横へと戻っていった。

“　波乱万丈”という言葉が似合うだろう。
陣がトラウマになりそうな夕食は終えた。
未琴は食器を片付けると満足しながら、帰ってしまった。

よって、沙希と2人っきりである。

陣はこの部屋に人を泊めたことはなかった

まぁ、今からキツネを泊めようとしているから何とも言えないのだが、

初めて、部屋に泊める訳である

そのため、沙希に与える寝具がないのだ。

はじめは、自分がソファに寝ればいいと思ってたのだが、

その考えは最初の十分で尽きた……。

沙希はソファに横になると、テレビを見ていた

キツネの姿で

陣が使っている2ＬＤＫ。　聞こえはいいかもしれないが、

オプションでついてきたソファで、横いっぱいの居間、

シングルベッドしか置けない寝室。何故か、オープンキッチンのこの間取り。

どっかの有名設計者が作ったのだが、

家賃が安いので文句は言えない。

そこで、気づいたのは、沙希はキツネで、それなりに大きい。
寝室には狭すぎたのだ

もちろん、実際に確かめたが、陣自身狭いと思っている寝室を沙希は……

「狭いのは嫌！」

の一点張りで、
結局ソファに寝てもらうことになった。
そして、現在の状況である

「沙希は何で倒れていたんだ？
この地域に、そんな色の狐はいないはずだ。」

沙希はリモコンを置くとスナック菓子に手を伸ばした

「うちの一族はね、元々、関東地方棲んでいたの
私はこの毛並みでわかると思うんだけど銀狐って種類のキツネでね。
銀狐はその白い毛並みが美しく、縁起が良いと
その頃、神社で祀られていたんだ…

時代の流れで、神社が廃れると

今度は私たちの毛皮を狙った
猟師や成金野郎に一族のほとんどを失ちゃって、
母さんや少数の力を持った狐は、北海道まで逃げて、元気にやってるんだけどね！！」

沙希はスナック菓子の袋を開けられずに、
陣に投げてきた。

陣は受け取ると

「じゃあ、沙希は北海道出身なわけだよね？
それに俺が見たとき、ただのキツネじゃなかっけ？」開けたコンソメポテチ７０gは二口で沙希の胃の中に消えた。

「ただのキツネだったら、誰も気にしないでしょ
母さんもよく使ってたし。
けど北海道から、４日かけて来たはいいけど
体力が続かなくて、倒れちゃったんだ～！」

口の周りをキレイに舐めまわすと
あなたに見つかったときはやり過ごそうとしたけど、失敗したやたんだよねと、
鼻で他のスナック菓子をつついた

もう一袋開けろの意味らしい。テーブルのチョコチップの袋を破ると、陣の膝の上に置いた。

「家出とかするの初めてだったの。
ひとまず遠くに行きたいと思ったから東京に来たんだけど、
森もない川もないコンクリートジャングルに餓死寸前まで頑張ったんだよ！！」

沙希の尻尾が、
陣の顔にクリーンヒット

「痛ぅ…、
家出なんて聞いてないじゃないか！！
明日、玲奈さんが来たら、強制送還ね！！」

戻ろうとする尻尾を掴むと、片手でチョコチップを摘む。

「嫌よ！あんなオヤジのところなんて帰りたくない！！」

テーブルの上まで乗りだすと、
前足で袋のチョコチップを狙う。

「うおっと…！
思春期特有の反抗期か！？
別に良いじゃないか！！たぶん、沙希のことを考えているんだから！」

チョコチップを上空に避難させると、

右足で防御体制をとる

「いーや。ありえない！あの変態オヤジ
春になると、私の冬毛をコソコソ集めてるのよ！！
今でも寒気より、殺気立ったのを覚えているわ。」

沙希は、右足に爪を食い込ませる

「やるから！
俺の肉をえぐるな！！」
チョコチップをテーブルに置くと、
沙希は満足げにたいらげた。…

陣は風呂からあがり、タオルで頭をわしわしと拭きながら、ソファに近付いた。

「沙希、俺は先に寝るけど……
沙希？……」

そこにはすやすや寝ている沙希の姿があった。

キツネ特有の長い尻尾を丸めて、ピンと立っていた耳は伏せていた。

陣は、そんな沙希をみて苦笑すると、寝室へと消えていった……。

第四話　神代家の一日（前書き）

祝！１０００ヒット達成！！

今後も居候狐をよろしくお願いします。

第四話　神代家の一日

朝日が眩しい……

　現在、7時。
陣にとっては早い時間

しかし、沙希は遅いらしい。昨日と同じ服を着たキツネは、カーテンと一緒に窓を開けた。

早朝特有の朝日と、室温に対して冷たい空気が地面を這うように、流れ込んだ

「未琴……！
もう少し寝かせてくれないか？
今だったら夢の続きが見られるかもしれない……。」

布団の中から、低重音な声が聞こえる。
朝に弱い陣にしては、なかなか考えた返答なのだが、沙希は気にくわないらしい。
無機質な寝室の壁を殴りつけた

“ドン！！”

「うるせー！俺の睡眠を邪魔するなっ！！」

陣は布団を剥ぐと、仰向けになって起き上がり、怒鳴ろうとした。
上半身、特に腹部に衝撃を受けた。

沙希の右足から放たれたローがめりこむ

倒れかけた陣のTシャツを掴むと……

「ジン♪まさかとは思うけど、私の存在とか忘れてないよね？昨日、
私にいろいろなことをしたジンなら覚えてるよね♪」

沙希はTシャツを掴む左手に力を込めると、
右手で陣の顔の輪郭をなぞる。

微笑みながら、陣に問う沙希の姿はこの世のものとは思えないほど、
輝いてた……。

陣には笑顔に隠された、どす黒い本心を見抜いていた

沙希の頭から突き出た狐耳と鋭く尖った右手の爪は、
気持ちが出てしまった結果である

「も、もちろんじゃないか！！白銀沙希サン？
私めがあなた様のお名前を忘れるはずないでしょう？」
（まぁ、いろいろやったのは沙希なんだけどね……）

沙希はTシャツから手を離したものの、
どこか不満そうだった。
沙希の耳が忙しなく動いてるを見た陣は
急に陣は好奇心からか、沙希の耳に触れた…。
柔らかい毛並みにとても大きな耳だった

沙希は一瞬、驚いた表情で陣の顔を見ていたが
すぐに瞼を閉じ、陣の懐に……？

「ジン君、おはよう！！今日は玲奈さんが来るんだ……
ほう？
盛りのついたジン君は相手が誰でも、襲っちゃう訳か♪」

ドアを開けた未琴は、怒り半分、
羨ましいさ半分みたいな顔で沙希を見ている

沙希は舌打ちをし、陣から離れた。
一方、陣は未琴の突然の登場に慌てふためいた。
「未琴、別に襲ったとかじゃなくて……沙希？」
沙希は真正面から未琴を睨みつけている。

（沙希、頼むから余計なことは言うな？
なっ！
ほら～未琴も睨み返さない。相手を刺激するでしょ！！）

陣は立ち上がることも、喋ることはできなかった嫌な汗で背中が、
汗ばんだ

二人とも、一歩も譲るきはないらしい
陣をはさんで静寂な攻防戦が続く。

やがて……

「ジンを起こして、はしとか
必要なことを教えてもらおうと思ったのに。
　未琴！どうしてくれるの！！」
沙希の尻尾が強気に左右に動く

「べっつにー♪
わたしには関係ないことだしーー。
それよりも、
ジン君は朝食は洋食？
それとも和食派？…」

陣に、ニコニコ振り向いた

「ちょっと～！
まだ、わたしの話は終わってないんだけど！
未琴は自分の部屋に戻ってたべればいいじゃん。わたしはジンと一緒に、あとでゆっくりいただくから。」

“一緒に”と“ゆっくり”を強調した喋り方だ

未琴は今にでも、沙希に言い返そうとしたが、
やり過ぎると陣に泣きつくので、ここは押さえてる。

そこで……

「ジン君はどうしたいの？」

沙希も陣の顔を見ると

「俺はどっちかというと、一人で……」

“ばふっ”

沙希の尻尾から容赦ない一撃が顔面にヒットした

結局、朝食は三人で食べることで落ち着いた。
沙希はしぶしぶといった感じだが、朝食のほうが大事らしい。

今日の朝食は洋食だ。
トーストとか、
基本的にはしの要らないメニューなのだが、未琴が……

「沙希は何をするかわからないから」

本人が聞いたら、真っ先に未琴の首に爪をたてただろう。
そう、思われてもしょうがないセリフを、こっそり陣に耳打ちした

沙希は自分のの朝食を食べ終えていた。

見た目１７・８の少女は食欲旺盛で、普通の女子高生みたいだ。

陣や未琴は二十歳前ぐらいなので、
量よりも質を好むらしく、バランスの良い朝食を少しずつ、口に運んでいた。

「沙希、ゆで卵食べる？」
陣は沙希の視線に耐えきれず、
まだ手をつけていないゆで卵を手に取った
「えっ？いいの～！
ありがとー！！」
ゆで卵を受け取ろうと手を伸ばすと……
「あんまり、朝から食べると太るわよ～！」
太っ…
沙希は未琴の一言で絶句した。
「なっ何、言ってるのよ未琴と違って
わたしはまだ、ピチピチの１７歳よ！！
二十歳越えしている未琴はどうだかしらないけど、わたしは新陳代謝がいいから♪」
「はぁー！！
私だって、まだ１０代よ！誕生日まで、三ヶ月以上あるし……。
だいたい、化けギツネなんだから見た目なんか関係ないじゃない！！」
糸口を見つけた！とばかりに、怒涛の攻めにはいったが、
沙希はニヤリと、笑うと
「ザンネンでした～～♪化けギツネは年取ってるイメージあるけど、

わたしは平成生まれの１７歳よ♪」
沙希は自分の尻尾を抱きしめると、ゆで卵に手を伸ばした。

「若いのに凄いなぁ
最初に会った時から思ってたけど、
沙希ってかなり優秀な妖怪だったの！？」
陣はゆで卵を渡すと、沙希の左右の耳の間をなぜた。

「そう！そう！
私って優秀かもしれないんだから、未琴にいじめられた分どんどん
誉めて！！」陣に駆け寄ろうするが…

……“ジュっ”……

沙希と陣の間に熱いフライパンが置かれた
中には、ふわふわのスクランブルエッグが出来上がっていた

「ジン君が何か物足りなくなると思って、作ってみたんだけど迷惑
だったかな？」
未琴は、陣の方だけを見て言った

当たらずに済んだことだが、明らかに沙希の侵略を阻止するものだった
危うく、陣の右手を焼きかけたが……

「ちょっと、危ないじゃないか未琴！
俺がやけどするところだった！！」

「別に、ジン君の手を焼こうとは思ってないし、ただ、沙希の頭触って、ニヤニヤしている変態野郎の手も焼けたらなぁって思っただけだし！」

語尾を強めて言い放つと、スクランブルエッグを雑に盛り付けた

沙希は陣へのダイブを阻止され、目前の皿に目を奪われている

ゆで卵は忘れられたままだ

「わたしもそっちのほうが食べたいかも～！」

皿から放たれたニオイを鼻をヒクヒクさしてぼそっと言った

「じゃあ、沙希はこっち食べる？」

「いーや！ダメ。
沙希は貰ったんだから、責任もって食べること！ジン君は優柔不断すぎ。」

未琴は沙希にはあまいんだから……と、
つぶやいてキッチンに入っていった
（優柔不断か……、）

「ジン、どうかしたの？」
沙希が心配そうに陣の顔を見上げた
どうやら、考えごとをしているうちに表情がかたくなっていたのだ

いや、何でもない…。

苦笑して、朝食の残りを片付けた

朝の一悶着が終わった神代家では平和な日常がはじまった

……ってわけはなく
今も沙希と未琴が言い争っている

「こっちのソファのほうが日当たりが良いんだから、しょうがないじゃなん！！」

銀狐の姿に戻ってる沙希

「ここからじゃないとテレビが見づらいし、あっちのソファ、じめじめしてるからイヤなの！！」

クッションを一つ抱え、沙希と対峙する未琴。

例のソファに座り、嵐の通り過ぎるのを待つ陣。

単純に陣の横に座りたいだけなのだが、そこまで素直になれない沙希と未琴。

理由をつけて、窓側のソファを狙っていった

「ひとまず、俺が向かい側にいくから、

沙希と未琴が座るってことで……」

「「そこを動くな！！

まだ話は終わってない」」

見事にハモった、ふたりの声。

ビクッと反応する陣。

（小声で言ったんだけどなぁ……）

“ピンポーン”

「俺、ちょっと行ってくるから！！」

部屋を出るとき、沙希と未琴が何かわめいてかもしれないが無視した

ドアを開けると……

「やっほ～！ジン、
久しぶりだね～
昼、まだでしょ？
お寿司、買ってきたから食べよ♪」

手土産、片手に陣を押し倒した！

物音に気づいた隣人と銀狐は玄関へ駆けつけた。

「やばっ♪」

そう、つぶやいたのは
苦笑しつつ、
どこかでニヤっと笑う玲奈だった……。

状況は一転した

窓側には陣と寄り添う玲奈。

向かい側のソファには、険悪ムードの沙希と未琴
三人前の特上寿司を目の前にして、無言のまま食べ続けている。

玄関でのこと……

沙希は、怒りからか玲奈へ襲いかかった
未琴は玲奈を知っていたため、睨んだだけだったが沙希は違った。
何も知らない沙希は、陣が襲われてるのと勘違いし、未琴の制止を聞かずに飛びかかった

玲奈は陣から離れるや、突進してきた沙希の頭を掴むと、
外へ投げ飛ばした！

「キャインっ」

見事に投げ飛ばされた沙希は、ぐでーとのびていた

「これが、例の霊狐か！なかなか、凶暴なヤツだ！！」

投げ方がイマイチだ！と笑いながら、沙希を背負っている。

未琴は驚きのあまり腰が抜けて立てなくなっていた。
キツネ姿の沙希を一本背負いした玲奈は、人を気にしながら、あの

巨体を担いできたからだ。
見た目は、どこぞの社長秘書を思わせるスーツ姿はとても、格闘家に見えない。

「未琴、ドアを開けてくれ！
ジン！アホ面こいてないで、さっさと寿司、もってこい！！」

ハイ！！と声を揃えて動き出した

目が覚めた沙希は玲奈を見るなり逃げようとしたが……

「お座り！！」

玲奈の一言でおさまった。

未琴が淹れたお茶を美味しそうに飲み干すと、
静かに話しかけた

「沙希と言ったな！
家出したはいいがこれからどうする？
このまま、放浪するなら強制送還だし
どこかに住むとしても、こちらの管理下にいてもらう！」口いっぱいにいれたイクラの軍艦巻きを飲み込んだ、沙希は淡々と言った

「ジンの部屋に住む！」

なっ！と声を上げた陣を後目に、玲奈は大人びた顔をほころばせ……

「そうか、そうか！！
では、決定だな」

玲奈さん！
陣は慌てたように声を出すと玲奈を止めにかかったが……

「強制送還しても、どうせまた家出するしな！！ジンの部屋の管理
しているんだから文句も無いだろう。」

そう言うと陣に抱きついた。
沙希とは違う香水の匂いが顔全体に広がった。

「玲奈さん！！
はっ離れて下さい？！
ほっ、ほら！未琴とか見てますし！」

「ＯＫしてくれるなら離れてあげる！」

いたずらっ子みたいな顔で答ると、陣の胸板に頬をこすりはじめた。

「ジン君！もういいでしょ。
はやく……早く認めなさいー！！」

ジンより先に未琴がヒステリックに叫んだことによって、
陣はＯＫをだした。

ちぇ！と離れた玲奈は機関に手続きしてくると出ていった。

残された陣は2人に、ボコボコにされたのは言うまでもない……

第五話　ジンと不愉快な買い物（前書き）

更新、遅れてすみません。
今回は新キャラ登場！？初の男性キャラは？
ネタ等よろしくお願いします。

感想、

第五話　ジンと不愉快な買い物

「沙希！水、出しっぱなし！！」

「沙希！冷蔵庫の中身を勝手に食べない！！」

「沙希！バスタオルだけで歩き回らない！！」

押しつけられた沙希を家で飼う？もとい、暮らすことになってから早1日が経過した。

沙希は非常識極まりないキツネだった。

他の仲間や母親から
多少、見聞きした情報を鵜呑みした結果……

「あんたは！
こ・こ・か・ら、出てけーーー！！」

と、未琴に叫ばれたのは言うまでもない。

「変だなぁ～。

母さんは同居人が喜ぶから、絶対やりなさい！！って言ってたんだけどなぁ～。」

（お前の母親はどういう教育してんだよ……）

陣がうなだれていると　……

「ジン君！

今日、駅ビル行かない？玲奈さんから帰り際に

封筒預かってるから

ひとまず、

支度してきて！！」

私も買っていいんだって～！と、未琴は自室へ戻っていた。（今月は結構、ピンチだったんだ～！

食費かかるし……）

陣は封筒の中身を確認しつつ、

横目に、食パンにかじりついた沙希を見た

十万ちょっとの金額とハガキサイズの紙がでてきた。

（これは……！）

前回の除霊をしたときの領収書だった。

何故か泣き崩れた陣の頭を理由わからずに撫で続ける沙希だった

着替え終わった陣と沙希は、未琴の部屋を訪ねた。
沙希が今着ている服は未琴のモノで、カジュアルなワンピースにバギーデニム、沙希に合っていて
しかも、モデルなみに着こなしてる。
沙希がキツネだと知らなかったら、陣だって隣に立つのを躊躇しただろう。
陣とて、日本人離れした容姿にYシャツが似合い過ぎているはずなのに……
沙希ってこうゆうの得意なんだ…
と、関心しつつドアをノックする陣。
「お待たせ～。
おっ！流石、ジン君
モデルみたいじゃん！
沙希は……フン♪」

小娘が！
その程度で難攻不落の神代陣が堕ちるはずねーだろうが！！
心のなかで毒づく未琴は、沙希にガンを飛ばしつつ上半身を強調する
一方、沙希は下唇を噛みしめ自分の胸元を手で覆った。
まだ、未発達な沙希に対して未琴は、
肩の開いたボーダーキャミにフレアミニスカートで、
スタイルの良い体を見せつけた

「すごい似合ってるよ未琴！
沙希も可愛いんだから…未琴を睨まない♪」
陣は何気なく言った一言なのだが、
沙希は微笑し、未琴は顔をひきつらせた
沙希は陣の手を引っ張って、さっさと階段に走っていった。

「ち、ちょっと」
引っ張られた陣を追いかけるべく、
未琴もマンションの階段を降りた……。

駅ビルに着くまで、もっとたいへんだった
陣は他人の目を惹きつけたからだ

沙希は階段を下りてからずっと陣の右手を、抱きしめながら歩いている

端からみれば、仲の良い恋人同士だ。
未琴に先手を取った沙希だが、ここまでに多大な攻防戦があった

反対側から未琴が陣に抱きつこうとする度に、
沙希が陣の体制を崩す

一緒に歩きたいだけなのでさすがに、押し倒したら気まずくなり
1日を台無しにしかねない。

手を出せなくなった未琴…
沙希は陣を質問攻めにしたことから、
未琴は二人の後をついていくしかできなかった

その光景から、陣は彼女と侍女を持つ
めでたい野郎！にしか見えなかったため、
羨望と嫉妬の視線を受け続けた。

何も気づかない陣は鈍感を通り過ぎたかもしれないと……
未琴が心配したのはまた別の話。

「じゃあ～、まずは服から揃えないと……」

駅ビルにやっと着いた

未琴がメモを片手に、
沙希と陣に指示した
（一年ちょっとの付き合いだけど、
未琴は要領がいいな！！）

陣は自分主義の結果が
全ての人間だ。
要領よりも、惰眠を優先したい
いわゆる、ダメ人間である

未琴は逆に前々から用意する、そうでなければ何も出来ないと思ってる。その場しのぎは苦手で
陣がすごいと思う。
他人が聞いたらイヤミにしか思えない……

「ジン君！これとか、どう？」
「すいませーん♪
試着していいですか？」
「沙希、似合う！似合う！！」

未琴は凄まじかった。
着せかえ人形とは、
この事を言うのだろう

レジには大量の服、
試着室で倒れる沙希、
陣の封筒を握りしめた未琴、
呆然と立ち尽くすことしか出来ない陣だった。

会計の終えた未琴は沙希を連れ、下着コーナーへ駆けていく
追いかけようとした陣だが、女性の下着コーナーは下水道よりも居づらい。
自販機の横にあるベンチに再び腰を下ろす

「ジン、ここで何をしているんだ？」

この作品には聞き慣れない男の声。

「燈輔（トウスケ）さんこそ、何しているんですか。

四年生といえば、就職活動で忙しいでしょ？？」

陣は顔をしかめる。

「どうせ、私には茶しか才能がないからな。

ジンこそ、何で婦人服コーナーに？まさか、女装……」

燈輔は日本人特有の渋い顔をさらに渋くする。

燈輔は茶道の家柄で、白泉大に進学したいがために、京都から上京した

「兄さん！止めて下さい。ジンさんが、女装なんてするはずがないでしょ！！」

温室育ち二十年間！

税金で家が建ちます！

某チェーン店のハンバーガーは食べたことはありません！

清楚なお嬢様。

言葉を具現化したような少女が、燈輔の後ろからひょっこり出てきた。

「ジンさん、この度は兄が不躾な発言をしてしまってすみません。

私はあなたにそんな趣味がないことはわかってました！！」

鐵清（クロガネ・キヨ）は陣の手を握り、弁解をする。

清は白泉大の同期生で、学年トップクラスの頭脳に、

“茶道サークルの華”と称される美貌。

しかし、ミスコンいわゆるミス白泉の候補として、確実といわれながら当日に失踪したため、

無冠のままである。

「ところで、ジンさんはどうしてこんなとこにいるんですか？」

謝るの止め、尋問モードにはいった清。

気のせいか、目の瞳孔が獣のように細くなった

「未琴と友達が下着コーナーにいるから、

まぁ！行き場を失った俺はベンチに残留ってな感じ……」

急に燈輔がニヤニヤ笑いだす。

「要するに、清は先を越されたわけか！！

朝比奈のやつもやるなぁ」

膝までついて、笑いだした燈輔の顎に清の右膝がめりこんだ。

「兄さん！その邪魔そうな舌を焼き切って差し上げましょうか？」

美人が怒ると怖い
先人はよく考えたものだ
全く、そのとおりだ！と陣も納得する。

「清が積極的にいけば、良い話ではないか！
朝比奈とその友達ってのが気になるしな。」
燈輔は陣に聞こえないように、コソコソ喋った
「む、無理に決まってるじゃないですか！！
未琴ちゃんだって、
あんなにアピールしてやっと名前で、呼んでもらってるらしいですよ！？」

興奮しながらも、陣に聞こえないように注意をはらっている。

陣は目の前でコソコソ話す鐵兄妹に、話しかけることも出来ずベンチに寄りかかっていると……

「ジンく～ん！
もう、帰ろ～！？」

遠くのほうで、未琴と沙希が手を振っていた
鐵兄妹はまだコソコソと話していたので……

「悪い！燈輔さんと、鐵さんとあって、話してたんだ！！」
二人のもとに駆け寄った陣。沙希の手には、紙袋が握られていた

「くろがね……？」
沙希は何かを考え込んでいた。
「もうそろそろ、帰ろうか？」
沙希は陣から言われると考えるの止めて、こくりと頷いた
陣たちは、さっさとエレベーターに乗り込んでしまった

話しを止め、その光景を見入ってた鐵兄弟妹は…
「何ですか！
未琴ちゃん達は。ジンさんと楽しく、ショッピングですか！？」
清は、片手でスチール缶を握り潰した。
「まぁ、落ち着け。
よく見て見ろ！

朝比奈といる少女は、人間じゃない。
霊力がだだ漏れだし、
さっき、陣からキツネの匂いがしたの気づかなかったか？」
清は俯いて……。
「ジンさんだって、霊能者ですよ！！
いくらなんでも……」
「あぁ！だからこそ、認知の仲なのだろう！？
明日、白泉大で確かめれば良かろう。
明日が楽しみだ♪」

鐵兄妹の言ったことも、知らない沙希は、
家に着くとソファに寝そべった。
未琴は部屋に戻っているらしく、ここには陣と未琴しかいない。
「沙希、今日はいろいろと買えた？
未琴に連れまわされたみたいだけど…」
どこか元気のない沙希に話しかけた
「うん…ちゃんと、買えたよ…

未琴は何だかんだ、
わたしのことを面倒見てくれたよ…」
抑揚のない声で答えた沙希は自分の尻尾を抱きかかえると、頬ずりを始めた。
「鐵(くろがね)か…」
沙希はぽつりと呟いた。
「燈輔さんは、サークルで、知り合った先輩で清さんは、燈輔さんの妹で茶道サークルで知り合ったんだけど、どうかした?」
陣は首をかしげながら、答えた。
気のせいか…
まぁ、小さいころに聞いただけしね
沙希は起きあがると…
「ジン!今日は何食べる?今度は甘いものがいいなぁ♪」
陣はため息つくと…
「たぶん、中華だと思うな!未琴、辛いの好きだし…」
何か、喚き散らす沙希を止めようとした陣は沙希の頭を撫でていた。

隣の部屋から来た未琴は絶句した。
そのあとのことはあまり覚えていない。

だが、数分後に未琴は気絶した陣を抱きしめていた……。

第六話　沙希と不愉快な鐵兄妹（前書き）

少し、コメディよりもラブが強くなった作品ですシリアスな展開もありますが、なんとかコメディで閉めたつもりです。　感想、評価等をよろしくお願いします♪

第六話　沙希と不愉快な鐵兄妹

陣は今、講義の真っ最中だ。
一週間後に控える試験と、論文
陣は二年目にして、最大級の多忙を迎えた
隣には未琴、その隣には清が座っていた
　現在、経済の講義中
清は惰眠を貪っている
容姿、家名、財力、そして頭脳、お嬢様として全て揃った清にも直しようのない欠点があった

　性格だ……。

パーティーよりも、友達んち
三ツ星レストランのフルコースよりも、ファーストフードのセットメニュー
わがままではない。
清の独特の価値観だ
清はどこぞの料亭の品々を自分の部屋まで持ってこさせると、

使用人に買ってきてもらったフライドチキンを食べ、料亭の品々を使用人に与えた。

隣には未琴、その隣には清が座っていた

現在、経済の講義中

清は惰眠を貪っている

容姿、家名、財力、そして頭脳、お嬢様として全て揃った清にも直しようのない欠点があった

性格だ……。

パーティーよりも、友達んち

三ツ星レストランのフルコースよりも、ファーストフードのセットメニュー

ただのわがままだ。

清はどこぞの料亭の品々を自分の部屋まで持ってこさせると、使用人に買ってきてもらったフライドチキンを食べ、料亭の品々を使用人に与えた。主従関係からなる感動エピソードだ

現実は、兄の燈輔に、食べさせないためである

兄の燈輔はシスコンではないものの、

持ち前の渋さと大人びた性格だ…

オヤジ臭いだけ！！
清に言わせれば、その程度だ。
燈輔は気にせず、
「そこが、清の可愛いところであろう！」
燈輔はバカ笑いをすると立ち去ってしまった。

「清？清！！
講義終わったから、出るわよ。」
未琴は清を半ば、引きずり陣の待つ食堂へと
歩を進めた
「未琴さ～ん
清は眠くて、あの授業についていけませんよ～！」
引きずれながらも、必死に顔だけ未琴を見た
「何言ってるの！！
一つも単位を落とさないアンタならだいじょうぶでしょうが！！
ジン君が席とってるから急ぐ！！」
食堂に着いた二人は、陣がいる窓側に行くと…

「清！良いところ来たではないか！
陣の家に行きたくないか？」

燈輔がいた

「兄さん…私から、幸せを奪うつもりですか？
ジンさんの前から今すぐ消滅していただきたいのですが……」

言葉は丁寧だが、右手で燈輔の襟を掴み上げている

「まぁ、待て！
清も陣の家に行ってみたいと思わぬか？
どうやら、朝比奈は陣の家に入り浸りらしいぞ」
陣が慌てて仲裁に入る
「待って下さい！
未琴はただの隣人で
特別な関係じゃあないですから！！」

そこで何で不機嫌になるんすかね～未琴さん

未琴は後ろを向くと…
「いいもん！ジン君はわたしが作ったご飯、美味しいって言ってくれたし！！」

叫びやがった

堂内にいた学生たちは、一瞬にして未琴たちに注目した。
清は未琴に殴りかかり、陣は燈輔と二人を連れ食堂から走り去った
……

只今、大学の近くの喫茶店にいる
白泉大は騒然となった

食堂での出来事は集中力が切れた学生たちには、瞬く間に広がった…
校内に居づらくなったため一時的な避難である

「ジンさん、大丈夫ですか。何か物凄く怯えているように見えるんですけど…」
清は心配して、陣の背中に手を回した。
未琴の視線が痛い

「いや…明日から、大学でどうしようかな～
なんて……」

「別に♪ジン君なら大丈夫だよ～。
わたしとジン君の関係じゃん！！」

嬉しそうにコーヒーを啜った。

「未琴、お前はただの隣人だろ。」

陣はテーブルに崩れた

清は燈輔の目配せに頷くと…

「ところで、ですけど♪ジンさんはキツネと関わり持っていますか

？」

清の瞳孔が獣みたく、細くなった

陣と未琴は驚きを隠せないでいる。

「ん～♪やっぱり、何かあるようですね！？」

清は陣の右手を持つと立ち上がった。

陣はつられて立つ、未琴は燈輔に連れられている

「じゃあ、行きましょうか！

ジンさんの家へ♪」

沙希はソファーに寝そべっている

慣れるためか普段から、人型をとるよう心掛けている

それでも、気の緩みや突然の出来事で耳や尻尾が生えてくることも、

度々あった……

昼食は未琴に用意してくれた弁当を食し、容器を水に浸けてある

沙希は少しずつだが、家庭スキルを順調に身に付けている

と、言っても暇には変わりない。

テレビを付ければ、ドラマや映画など最近から、テレビを見始めた

沙希にとっては難しい。

外に出てはならないと、陣にキツく言われているため部屋に籠もる

しかない

（暇だな～、ジンはまだ帰ってこないか…
……お腹へった……）
ガチャ……
ドアが開く音がした
沙希は一目散に玄関の方へ駆け出した

陣は鍵を取り出して、鍵穴に差し込む。
小気味よい音とともに、ロックが外れた
燈輔は一気にドアをあけた

ここには、未琴はいない鐵兄妹によって、自室に籠もるよう言われたらしい

ドアが開くと直ぐに沙希が見えた。
しかし、耳と尻尾が生え目は猛禽類のように、鋭くなった

「ほう…
白キツネは絶滅したものと思ってたが、
まだ居たとはなぁ～♪」
燈輔は楽しそうに笑った
「お前は誰だ…

人じゃないな！
ジンに何をする気！！」
沙希は燈輔に飛びかかった！
燈輔は脇に身を寄せると、清が間に割り込んだ
「別にジンさんには手を出す気はありません
ただ、あなたには興味があります。
霊能者の神代陣が何故、キツネの妖怪のあなたと一緒に住んでいるのか
ジンさんとの関係は？
一般人の未琴ちゃんと面識があるのか
だいたい、未琴ちゃんとあなたはジンさんの部屋に出入りしているんですか？清だって、まだそこまで……」
清が一人加熱したのを見て…
「清！話がずれてきとるぞ！！」
燈輔が慌てて、止めた
あいからわず、蚊帳の外の陣は……
「ちょ、ちょい待ち！！燈輔さんと清さんは…」
「清さんじゃあ、ありません！！
私のことは清と呼んで下さい！！」
は、はい！とすぐさま答える陣を見て…
（へたれが……）

沙希がこっそり思ったことは、心の底に沈めておこう……

「まぁ…
私たちは鐵＞クロガネ＜一族の黒狐です。」

言い終わるのが早いか、清の頭から、耳が生え
お尻からは真っ黒い尻尾が出てきた

陣は沙希で何度も見た光景だったが、
さすがに入学当時から友達の頭から耳が生えてきたら、フリーズしてしまうだろう。

「つまり、あなたと同じキツネの妖怪なわけですよ……」

沙希の手を離した。
　沙希は清を見つめ直すと……

「わたしは母さんから聞いたことある
もともと、白銀と鐵は同じ神として奉われた狐だったんだけど
江戸時代になってから
朝廷と幕府によって二つに分けられたんだって」
清は沙希の言葉を継いで

「私たちは京都で、暮らすことになりました
古い町並みを残っていて、とても住みやすいところでした……
しかし、開国した日本は我々を恐れ、討伐や住処を奪われました
霊的な能力の高い妖怪だけが、人間のように生きています。

ジンさん！
ごめんなさい…
あなたは霊能者。
正体がバレれば、何をされるかわからないので
今まで黙っていました。
本当にすみませんでした！！」
清は陣に泣きついた
　清にとっては苦渋の選択だったんだろう…
顔は涙でぐちゃぐちゃになっていた

「別に、清が狐だろうがかまわない……
清が清であって、それ以上でもそれ以下でもないって！！」

陣は慰めているため、沙希は暇で、しょうがないようだ。

（暇だなぁ～
未琴のところで何か作ってもらうかな…）
そこには、沙希と同じように呆れた表情で見ている男がいる

「すみませーん！
隣の未琴のところでお茶しませんか？
ほら、ジン行くよ！！」
沙希が陣を引っ張ると…

「いいじゃないか！！
朝比奈は茶もまずまずだしなぁ～
ほれ！清、いつまでやってるんだ
さっさと行くぞ！！」

燈輔は清を引っ張ろうとした
ただで終わらないのが陣だった

沙希が引っ張ったことによって、陣は体制を崩すと清を押し倒してしまった。

それだけならよかったのに……
倒された清は……

「え、えーと…よろしくお願いします…？？」

陣は気づいたら投げとばされていた
沙希はマウンドポジションをとると、

「盛りのついたジンに鉄槌を……」

右手を振り下ろそうする沙希に…
「誤解だって！！
だいたい、沙希だって……ぎゃあああぁ…」
目の前にはその光景を苦笑いを浮かべる燈輔

薄れゆく意識のなかで最後に…

（この作品って
コメディだったっけ……）

第七話　燈輔と南の孤島（前書き）

今回は、燈輔がいっぱい出てきます♪　　ランキングも、徐々に上がってきているので応援、よろしくお願いします。

今後も、感想・評価等もドンドン送っちゃってください！！

第七話　燈輔と南の孤島

暑い陽気

焼けこんだ砂浜

露出の多い水着を着た清と、アロハシャツを着込んだ燈輔。

「いや～♪夏はアロハシャツに宇治金時に限るっ！！」

誰もいないプライベートビーチで叫んだ燈輔。

「兄さん…

まず、アロハシャツ似合ってないですし

だいたい！兄さんの宇治金時は、抹茶に氷ぶっこむだけでしょ…」

呆れ顔の清は、ビーチパラソルを設置し始めた。

ここは、鐵家保有

太平洋のど真ん中にある無人島

自家用ジェットで、八時間

直径八百メートルのいわゆる、南の島だ。

陣は兄妹喧嘩を横目に、クーラーボックスを下ろした

（オレの妹はどうしてるかな……）

陣の妹は両親が居なくなったと、同時に親戚のところに居る。

陣は玲奈に預かられていたため、それ以来妹とは会っていない……

鐵兄妹を見ていると、心が苦しくなった…

「ジン君、泳ぎに行こうよ！！

今、沙希が浮き輪取りに行ったから♪」

未琴はフリルの散りばめられたビキニを着ていた

胸が強調されるデザインは、どうやら他の二人への対抗らしい…

海はとても、綺麗だった

数十メートル続く透き通った海水には、

南国の熱帯魚とサンゴ礁

そして、ビーチボールで遊ぶ妖怪二人と、

一般人の女性はとても楽しそうだった

「いやぁ～！

微笑ましい限りじゃないか？陣

何故、私らはこのような扱いを受けなければならないんだ？」

燈輔は無精ひげについた砂を落とそうとする

「燈輔さん、諦めましょう…
ほら、未琴たちはあんなに楽しそうですよ。
それにしても…燈輔さんたちが妖怪だなんて、
全然、気づきませんでしたよ。」

陣は頭しか動かせないなりに何とか、目の前にいるカニを追い払おうとしている

「まぁ霊力は消していたし、行儀や作法もわきまえているからな～
一回だけバレたがな…」
陣に追い払われたカニをバリバリ、食べ始めた

「へぇ～、オレなんて疑いもしませんでしたよ
つーか、口の中痛くないんですか？」

やっと、砂の中から右手が出た陣は
何とか、左肩を出そうとする…

「…ペッ……、清と二人で歩いていたら、スーツ姿の女に首輪を掛けられてな、
清からは冷たい目で見るし、体が動かなくなった時に清を呼んだんだが……。
清が襲いかかったら、
投げ飛ばしたからな…。初めて、恐怖を味わったなぁ！！」

しみじみ語る燈輔を横目に陣は早くも、
上半身を引き抜こうとしている

「何ですか？
そのバケモノみたいな女性は……
どっちが妖怪がわからないじゃないですか。

よし！！
砂から抜け出せたところで仕返しますか！！」下半身も抜けると、
全身の砂を落としている

「あれ…ジン君出てきたんだ
け、結構気持ち良かったでしょ？
べ、別にからかうとかじゃないからね。
だよね、沙希？」

予想外の事態にたじろぐ未琴は、沙希に助けを求めた。

「そうだよ！ジン。
未琴が、喜ぶからって。ねぇ、砂の中って気持ちいいの？？」

沙希は真っ白のビキニにパレオを巻いていた。
一瞬、魅入った陣だが
沙希が抱きつこうとするのを見てすぐさま、ビーチボールを投げつけた。

「清はジンさんに何もやってませんしね。
兄さんには、もうちょっとあのままでいてほしいですけど、

まぁ～！ジンさんが言うなら掘り起こしてもいいけど…

でも、その代わりに清に……」

清は妄想の世界にトリップしているようだった

黒のヒモビキニで包みこまれたカラダを抱きしめられながら、腰をくねらせている。

黒のビキニは清にとても似合っていた。

清はけっしてスタイルが良いわけではなかった

大人の色気を持つ未琴、

あどけなさを残しつつ

小柄ながら起伏に富んでいた沙希

それらに対して、清は劣っているかもしれない

だが…違った

沙希や未琴よりも高い身長には、無駄な脂肪のないカラダにくびれた胴体は一つの芸術品だった

鈍感な陣は気づいてないが、大学内でとても有名だった

燈輔筆頭に結成された茶道サークル。

本格的の茶道具に本家直伝の技術には誰もが一度はここを目指したろう

特に、鐵兄妹狙いが後を絶たない……

陣は鐵兄妹に誘われ、もとい監視下に置くために入った

茶道サークルは推薦なしには入れないが、未琴は清に誘われて入っていたらしい

清も兄とだけでは流石に嫌らしく、未琴を誘ったんだが、一緒にいる陣を見て一目惚れした

情報がなかったため、未琴から得ようとしてサークルに誘った。

陣が知らないうちに鐵兄妹からは目を付けられていたことになる

今回の海水浴は茶道サークルで、行われた合宿である

もとい、別荘での豪遊だ

「ちょっと～！清ちゃんはジンに何させようとしてんのよ！！

燈輔さんは？

まだ、砂の中に埋まってたわよ」

未琴は陣からの追求を逃れて、海を泳いでいたらしい…

髪はカラダにへばりついていて、未琴は前髪をかきあげた。

「未琴ちゃんは黙っていてください！

私はジンさんと砂浜でビーチバレーでもして来ますから」

髪の毛の中から、真っ黒の大きな耳が出てきた

勢いのあまり、人化が解けたらしい。
すぐさま、真っ黒な尻尾も出てきた
次の瞬間……

「ナニ見てんのよ！！
エロジンが～♪」

沙希が突っ込んできた

沙希と陣は海の中へダイブした。
沙希も尻尾と大きな耳が突き出していた。
陣は絡まった手足を解こうとするが、沙希は抱きしめてきた

「沙希！離れろ！！」
ところが沙希は……

「良いじゃん♪減るもんじゃないんだから。
2人がイチャイチャしてるんだから、わたしたちだってイチャイチャしようよ??」

あれがどうやったら、イチャイチャしてるような見えるんだ?
ほら、2人ともつかみ合ってるし……

「とにかく、沙希は離れて！じゃないと2人が気づ……」

遅かった…
沙希の後ろには、鬼神の如くそびえ立つ2人の姿。

「あらあら、ジンさん
沙希ちゃんと引っ付いて、何をしてんでしょうか？
ねぇ、未琴ちゃん？
それに、私たちを出し抜いて、何やっちゃてるんでしょうね沙希ちゃん♪」

清が沙希の右肩を掴む。

「そうそう、
ジン君は何やってんの！沙希も、抜け駆けしてんじゃないわよ！！」

未琴も左肩を掴むと、一気に後ろへ引っ張った。
「きゃっ！」

沙希は背中から海に放り込まれた

「痛……、
何すんのよ！未琴と清は引っ込んでてよ。
だいたい、未琴がジンを埋めちゃおうって言ったんでしょ！！」

沙希も本能むき出しで、二人に掴みかかる。

いや～、どうすっかな。オレ自身、危ない気がするんだよね…
ほら、清と沙希とかさ～
明らかに人間技じゃないじゃん？尻尾とか生えてるし。
未琴にいたっては、あの二人についていける時点で…

陣がひっそりと逃げ去ろうとしていると。

「あれー！ジン君はどこに行くのかな～？
自分が原因だって気づいてないのかな！！」

清と沙希の攻防戦に目を奪われていたため、反応が遅れた。

「うっ……。」

未琴の頭突きは、陣の顎を打ち抜き、卒倒させるぐらいの威力はあったらしい。

沈みかけた陣を見た未琴は…、

「ん～…、
まっ！しょうがないな。」

未琴は浅瀬から浜へと、陣の片足を持ち、歩き始めた。

太陽は傾き、一日で一番暑い頃だろうか

「あれ…、陣はどこにいったんだろうな？」

あっさりと、砂中から這いだしてきた燈輔はビーチを見回し、陣を

探していた。
清と沙希は、さっきの戦闘は嘘のように二人揃って、尻尾の手入れをしていた。
「あっ～、何でこんなに塩が出てくんのよ！！
このままじゃっ！毛が傷んじゃう……。」
沙希が俯いていると。
「しょうがないでしょ…海の中で、半妖になってしまったんですから。
でも、洗いすぎると毛が抜けますからね。」
清は丁寧に取り除いている。
「すまんが、陣はどこへ行ったのだ。」
沙希がイライラしながら答えた。
「あぁ～、ジンなら未琴に干されてたよ。」
燈輔は浮かない顔をしながら、岩礁のほうへ歩き出した。
しばらくすると……。
「うお……。」
燈輔が驚くのも、無理はない。
陣の背中は、この熱い日差しで真っ赤になっていた。

うつ伏せに寝ていたため顔は焼けていないものの、日にあたってる部分は痛々しかった。

「おい陣！、大丈夫か。確か、別荘に薬用のヤツがあったと思うから安心してくれ。」

「み、水……。」

陣は海の中へ入ろうとする。

「ば、馬鹿
止めるんだ陣！！」

燈輔は慌てて、止めようしたが遅かった…。

「どうしたんですか？
ぷはっ…、やっぱ気持ちいいですね。
海の中は！！」

「阿呆が……。
よく考えてみろ。
体中、傷だらけで海水に浸かってるんだぞ。
いくら、お前でも……。」

陣の顔はどんどん、青ざめてきた。
急いで、海からあがってきた。
さっそく、背中がヒリヒリするのだろう。
陣は苦痛に顔を歪めながら、最後の言葉を紡いだ

「み、未琴……呪ってやる！！」

第八話　陣と酒乱の宴（前書き）

更新、遅れてすみません。今回の第８話は今までとちょっとだけ変わっています。楽しんで、ご朗読よろしくおねがいします。感想・評価をよろしくお願いします！！

第八話　陣と酒乱の宴

「痛っ……」

陣は清に外国で市販された乳液を塗ってもらっている。

半日近く放置された背中は悲惨で、
焼け野原みたいなものだ。
燈輔によって発見された後、鐵家所有の別荘で
介護を受けていた。

「雨、やまないね。」

沙希は、雨が打ちつける窓を眺めていた。

「しょうがないじゃないですか。
北半球は夏真っ盛り！
台風が来ないほうが珍しいんですよ」

あっけらんと、答える清だが陣の相手をしているおかげで、まんざらでもないらしい。

「でも、つまらないよね波も荒れてきちゃって
このままじゃ…
明日もダメっぽいじゃん！！

ねぇ、何かないの！？」

ソファーにふんぞり返る未琴は衛星テレビの電源を、落とした。
現在、メンテナンス中の陣からは軽い無視を受けているため、
相当イラついている。

「この別荘は、娯楽よりも住居スペースを意識した造りになっていて、茶室やラウンジにはこだわりを持っているが、
他は手付かずなんだ。」

私には関係ないがな

余裕でばか笑いを続ける燈輔を未琴は地獄突きで黙らした。

壮行している間に、雨は土砂降りになっていく。
壁に吹きつける暴風雨によって、
室内は外さながらに騒がしくなってきた。

厄介ごとは突然起こるらしい。

陣が背中を上に向けて、寝ていると……

「ジ～ン。わたし、もう飽きたの
早く、帰ろうよぉ～」

沙希は狐の姿に戻ると、ソファーに寝そべる陣をまたいで、押さえつけた

「沙希……、いつになくハイテンションじゃないか～？
未琴達と何、飲んできたか、言ってみ？」
陣はできるだけ、優しく問いただした。
アハ～と息を吹きかけてくる。
「え～と、
シュワシュワするジュースでしょ～
ちょっぴり苦いやつに、グレープジュース、
のんだのぉ～！！！」
酎ハイ、日本酒、ワイン
狐はどうだか知らないが、普通の人だったら酔いつぶれるかフラフラになっているだろう。
目の前にいる沙希は、
足取りはしっかりしているものの、
現在の状況からみて、かなりヤバい。
「ジ～ン、かまってよ！相手にしてよ！
いっしょに遊んでよ！！」
いつの間にか、半妖
（人型に耳と尻尾のオプション）
になると陣の上半身だけを起こし、腰に手を回し抱きついた。
陣に頬ずりする姿は、幼い子供のようだ。
「ちょ、ちょっと待って！清は？ほかはどうなったんだ？？」

陣は慌てて目と話を反らしたが、顔はニヤけていただろう。
沙希も尻手か知らずか、陣の動きに合わせて目線を合わせようとする。

「なんで？
わたしだけじゃ、不満だっていうの～！！」

沙希はわざとらしい泣き真似をする。

「いや…別にっていうか～、不満とかじゃなくてね沙希？
沙希が嫌いとかじゃないよ！とにかく。
だけど、他のウォッ…」
突然、沙希は手を首に回すとそのまま、もたれかかってきた。

「さ、沙希？
ちょっと危ないから、
早く離れてー！！」

ヒステリックに叫ぶが一考に離れる気配はない。
スー、スー、スー

あれ？
この展開何……、
沙希？…沙希！！

先ほどまで、活発に動いていた尻尾はだらんと
たれさがり、ピンと張った耳も、フニャと潰れている。

ふぅ……、陣はため息をつきながら、下から這い出た。

（良かったんだ…、これで良かったんだ…
でも、結構……。）

未琴がいれば、一緒に死のうと笑顔で言われたかもしれない。
それでも、満更でもないご様子だ。

沙希に毛布を掛け、リビングを後にした。

キッチンに向かうと、清の姿があった。
テーブルの上に散らばる缶や空き瓶の量からして相当、飲んだようだ。

椅子に座る清の手には、おちょこが握られ、微かに震えている。

着物を召している清は一見、堅苦しい感じだが
今日はほんのり頬を赤く染め、着くずれた着物から微かに覗く、
鎖骨が何とも言えない色気を醸し出している。

「ジンさま…」

ボフっ……
陣様の顔は真っ赤に染まった。

どうやら、清の仕草&様発言は陣様のドつぼを貫いたらしい。
慌てふためく陣に追撃が加わった。

「か、カラダが熱くて…なんか、火照っちゃったみたいで。
ジンさまぁ……、
助けてくださーい…。」

クラっ…
よく、考えろ……。
今、理性が本能に負けると…、
この作品は
「ノクターンノベルズ」行き確実。
抑えろ！
我が本能よ！！！

「ジンさまぁ！
こっちに早く……。」

バサッと、持ち上がる漆黒の耳と尻尾は、狐を彷彿させた。
上目遣いと、飲酒によって潤んだ瞳は、漆黒の闇のようだった。
むっくり、起き上がった清はテーブルにおちょこを置くと、ゆっくりとした足取りで歩きだした。

「わぁたしは～、ジンさまを好いていますよ。
いつまでも、アナタのこと愛し続けます。
だから、この際ガブッとひと思いに私を……」

トロンとした目は焦点が定まらず、
体もフラついていてとても危なかった。

それ以上に危険な人物がいた。

神代陣　二十歳

現在、

本能により内なる獣暴走中！！

＞ノクターンノベルズ＜行きを覚悟した陣は誰よりも輝いていた。
陣がフラつく清を抱き止めようとしたその時だった。

「ほらほら、清ちゃん！冷たい水でも飲んで、落ち着こうね～。」

奥から出てきた未琴が清の体を支えると、近くにあった椅子に導いた。

「ジン君も、ジン君だよ。一瞬、目つき変わったでしょ～。
まあ、手を出さなかっただけ良しとするけど。」

焦る陣に比べ、未琴は恐ろしく冷静だった。
いつもよりも、声に抑揚がなく、目も何故か寂しそうだ。

「未琴、お前は一緒に飲まなかったか？」

未琴は首を横に振りながら答えた。
「私も飲んだよ。
ただ、ちょっぴりお酒に強いから、あまり酔えないんだよね……。
たから、楽しむってより合わせて飲んでいるから盛り上がれないんだ。」

未琴は苦笑して陣の手を引き寄せ、抱きしめた。
「良いよね、沙希や清ちゃんは自分の気持ちに素直になれてさ。
私なんて、いつまでたっても何もできないし…」

未琴……。

陣は自分の腕に絡みついた細い手と
泣きじゃくる少女を見て、心を傷めた。

しかし……、

「だぁっいたい！！
なんで、清ちゃんが狐なのよ！
狐耳といい、尻尾とかって、何か反則なんじゃない！！
沙希にしたって、昼間からベッタベッタしすぎじゃない！？私に何があるってゆうのよ！
私なんか、私なんか……。」

……未琴？

先ほどの感動的なセリフはどこにいったんだろう。

顔を真っ赤にしながら喚く未琴は可愛かったが
（→ただのバカ）
自分が酔っていることがわかっていない人が一番、質が悪い。

「よし、よし！
辛かった、辛かった
もう、大丈夫だから（棒読み）。
清と一緒に寝てような！」

未琴は素直に従うと
清の横にちょこんと座った。

はぁー

陣は今日、何度目かのため息をついた。

幼児退行（沙希）、
天然誘惑（清）、
泣き上戸（未琴）

一緒に飲みたくないベスト3！と付き合った陣は憔悴しきっていた。

（燈輔さんはどこに行ったんだろう？……。
あの堅物な燈輔さんだったら、酒も強そうだし！！
未琴たちを運ぶのを手伝って貰おう♪♪）

目の前には茶室があった
燈輔が言ってた住居のこだわりらしいが、

別荘と言えども茶室は珍しい。

「あ、燈輔さん！！」

中にいた燈輔は浴衣姿だった。
大吟醸の一升瓶を片手に、落ち着いた様子であぐらをかいていた。

「陣ちゃん……。」

ボフっ……ゴホっ。

有り得ない！！

陣が最初にもった感想だった。
燈輔は撫で声で、しかもカマ口調だった。

「だぁぁいすきぃ！！」

燈輔は抱きついてきた。陣ちゃんが逃げ惑う。

「いやぁーっ！！！
ちょっと、待ってくださいよ。
燈輔さん、何しようとしてんですか？
冷静になってください。冷静に！！！！」

青ざめた顔した陣ちゃんは何とか、

逃げ切ろうとする。

「あぁら、陣ちゃんは冷たいわねぇ。
そういうところが
可・愛・いい〜！！」

ゴクンっ……、

陣ちゃんは扉に向かって走り出した。

「逃がさないわよっ！！」

直ぐに、燈輔が引きずり込む。

「ギャーーー！
燈輔さんに
喰われるーー！！！！」「もう、陣ちゃんたら
どんだけー♪♪♪」

彼が最後に
出会った泥酔者は
変態野郎（燈輔）だった。

短編　霊狐といなり寿司（前書き）

新シリーズ公開に伴って、［短編］という形での更新となりました。ちびちびと更新できればと思っています。どうぞ［居候狐］と［天使は悪魔にキスをする！！］をよろしくお願いします。

短編　霊狐といなり寿司

「ちょっとー！ジン君もこっち手伝ってよ！
早くしないと、また燈輔さんから怒られちゃうよ。」
未は世話しなく、手を動かしている。
「あの人、手伝いサボって何してんだろ。
」
陣は熱湯の中から、パックになっている油揚げを取り出す。
「だいたい、“霊狐は雛祭りの日、いなり寿司を食わないと毛が抜け落ちる”って本当なのか。
明らかに燈輔さんの欲望出ているだろ」
パックから取り出した油揚げをキュッと絞って酢飯を詰める。
「けど、沙希がハゲちゃったら嫌でしょ？
たまにはいいじゃない。
あの居候娘も起きてこないことだし…」
しかし、何故か陣の寝室のドアが開き、その居候娘が出てきた。
「残念でした！隣人（女）に愚痴られる気はありません♪」

「だったら、作るの手伝ってね。
半分はあんたのためなんだから！」

未琴は手際よく、いなり寿司を仕上げていく。

「沙希、霊狐っていなり寿司を食べないと、毛が抜け落ちるって本当？」

陣は燈輔のことを聞いてみることにした。

「毛が抜け落ちるのー！知らなかった・・・・
だから、クソ親父はあんなに大量のいなりを……（笑）」

沙希は笑いを堪えきれず、
腹を抱えて笑い出した。

「ねぇ～ジン。イクラと鮭は？
いなり寿司だし、あるよね！？」

「いや、そんなもん入れといたら、どっかの狐に食われるから。」

ナイナイ、陣は作業に戻ってしまう。

「沙希、一般的家庭のいなり寿司に、イクラなんて入らないから。
どうしても食べたいなら、ジン君の家から出てってね♪」

「そう、そう
未琴にわざわざ、ワタシ達の家に来てもらわなくても、
ジンと二人っきりで何とかできるから♪」

いつの間に着替えたのか、沙希はエプロン姿である。

「だいたい、人間なんかに美味しいいなり寿司が出来るはずないじゃん！！」

「何をー！
勝負よ。どっちがジン君好みのいなり寿司を作れるか！」

とうとう、二人が喧嘩もとい生産体制をとってしまった。
男の陣がここから追い出されるのも時間の問題だった。

『ピンポーン』

誰か来たようだ。

「はい、どちら様〜。
あ、清！久し振り」

玄関先に立っていたのは燈輔の妹、清だった。

「お久しぶりです、ジン様。
年明けの茶会以来ですね。

今日、兄さんの我が儘につきあわせちゃったみたいで、何かすみません」

「いや～、未琴と沙希ががんばちゃっているから、特に問題ないよ！
ところで、いなり寿司を食べないと、ハゲるとか抜けるとか……」
「あ、あれ信じてらしたんですか！？
ふふふ♪なんか、悪いことしちゃいましたね（笑）
あれはウソです♪」
清は着物姿でうずくまると笑い始めた。
「あれは兄さんが、いなり寿司を沢山食べたいからついた嘘ですよ♪
事実、私はいなり寿司が不得手で、これ、持ってきました！」
清は大きめな包みを陣に渡した。
「お！散らし寿司かぁ！
最近食べてなかったんたよな♪」
包みを開けると、魚介類をふんだんに使った散らし寿司が入っていた。
「清、上がってくれ！
燈輔さんが来れば、食べ始めるから」
「恐れ入ります。」
清はちゃっかり、上座に座った
「出来たよ、ジン君！
わたしの愛情が詰まったいなり寿司を♪」

「ジン、食べて！
いなり寿司の希望と可能性を見事にコラボしてみたの！！」
うわー、とうとうやっちゃいましたよ。この狐・・・・・
「正直に言うてみ、あんさん何を入れたん。」
陣の口調が可笑しいのはさておき、沙希の創作料理は時代の最先端を追い越してる。
彼女はとんこつラーメンに牛乳をいれ、クラムチャウダーのようだと完食したし、
他にも、半チャーと半うどんという新たなセットを編み出した。
「これなんてどう！胡麻ドレなり寿司。
意外に高いいなり寿司のカロリーを抑え、新たに酸味を加えてみました♪」
一見、普通のいなり寿司だったが、そこに胡麻ドレッシングを沙希はかけた。
「い、頂きます・・・・・」
陣は未知のいなり寿司を口に運んだ。
「どう！ジンの評価は……」
いや、不味いでしょうとばかりに未琴は顔を歪めたが、

陣は意外にも・・・・・・

「不味くはない…、ごま油の風味がなかなかいいかも！」

「でしょー！試食はしてないけど、絶対合うに決まってんじゃん！！」

沙希は自慢げにそんなに大きくない胸をはった。

「じ、じゃあ～私のいなり寿司食べなさいよ！
一般常識ってものを思い出させてあげるわ！！」

未琴は一般常識的ないなり寿司を陣に差し出した。

「ん～、何か微妙。
沙希のいなり寿司がさっぱり系だったから、味が濃…ふべらっ！！」

未琴が陣の左側頭部を膝でかちあげた。

「ジン君？もう一度よく噛みしめて考えて、チャンスをあげるから！」

いや、感想にチャンスもないでしょ。
と、ツッコミ返そうとした陣だったが、未琴のすごい剣幕に押されている。

「へたれ・・・」

清がぼそりと確実に聞こえる声で呟いた。

「ウルサい！清、ちらし寿司でも食べよ！
俺、清の料理がたべたいなぁ～」
陣の猫なで声に、清の理性と遠慮というものを消し去った。
「ジンさま、私のことをそんな風に想って頂けたと・・・・・
さぁ、ジンさま、私のところへ。」
清は物腰柔らかに話しているが、実際は・・・・・
「清！何で、俺に乗ってんの！
流石に読者含めた、たくさんの皆さん前で何やってんだ！」つまり、
陣は清に馬乗りにされてますね。ハイ
「ついでに私もいるのだがな。
最近、私のキャラがカマ風になっているんだが、
どう思う陣。」
いつの間にか、
きていた燈輔がいなり寿司をほうばりながら、自分のキャラについて語る。
「どうでも良いじゃないですか！今、アナタの妹に襲われいるんですよ。」
「何言っているんです？
私はフレンチキスで、ちらし寿司を食べて頂こうとしているだけですから♪」

「フレンチキスって、触れるだけって思われがちだけど、
実際、濃厚なキスのことを指しているらしいな。」
ここで、燈輔の無意味な雑学が炸裂した
「気づきませんでした、ジンさまはちらし寿司より、清の唇を・・・・・」
清は顔を真っ赤にして俯き、
震える声でその恥ずかしいセリフを言い、
下にいる陣に覆い被さった。
「ジン君は渡さない！」
未琴は陣の足を持つとそのまま、下に向けて引っ張った。
「のぉおおおお！！」
現実、そんなうまくいくわけなくTシャツが捲れ、
陣の背中にダイレクトに床とこすれた。
清から離れた陣だったが、背中に駆け巡る激痛にのたうち回っていた。
「ジン、大丈夫？」
沙希が駆けつけたのが、また不運だった。
「きゃっ！？」

沙希の素早い動きにテーブルが邪魔だったらしい。
陣の太ももに沙希のかかとがダイレクトに踏み潰した。
「ぎゃあああああ！？」
陣の悲鳴は生きている人間のものじゃなかったと語る燈輔氏。

「陣叫ぶ、
痛み忘るるは
何処かな。」

字余りと、燈輔はしみじみといなり寿司を噛み締める。

「一服してないで、燈輔さん！
早く助けて下さいー！！」

そこには妖怪二匹と人間に追い詰められ、ガタガタ震えるジン君。

「良い人生じゃないか。」

燈輔はやつれる陣を肴に、いなり寿司を鱈腹食ったとさ。

おしまい・・・・・・。

短編　霊狐といなり寿司（後書き）

5月の国家試験を受けて以来の更新となります。

作者は何とか受かりました（祝！！）

第九話　酒とクスリは程々に（前書き）

お久しぶりです。
国家試験のため、更新を遅らせてしまい、大変申し訳ないです
今後も不定期になると思いますが暖かく見守ってください！！
ああ、この後の期末戦線が・・・・（泣）

第九話　酒とクスリは程々に

「これ、燈輔さんから頼まれた品と
清から嫌みたっぷりの南の島の砂です」
陣はドリンク剤くらいの小さな小瓶と土嚢（砂の詰まった、麻で編まれた袋）を
未南雲（ミナグモ）教授と書かれたデスクに投げおろした。
「御苦労！と言いたいところだが、
鐵妹（クロガネ）は何を考えているんだか・・・・」
見た目四十路、もう少し若者らしい服装をすれば三十路ぐらいにみえるだろう
そのよれよれの白衣に無精髭じゃあ、どこかのやぶ医者に間違えられそうだ
「あなたがいつも、セクハラまがいなことをするからですよ。
この前だって、女子大生に手をだそうとして減給されたばかりでしょ！」
「ふ、他に何のために大学に来なきゃならないんだ？」
未南雲教授はデスクに足を投げ出した。
「人生は一度しかないんだぞ？
この大学は選りすぐりの美人ばかりだからな！
陣も駆け落ちまがいな付き合いも必要だと思うぞ」

「何の冗談でしょうか？未南雲教授。
駆け落ちまがいな付き合いって、いきなりヘビーなところからハイったら、
デルときには老けちゃいますよ…（精神的に・・・）
そんなことしているから、人生を棒に振るんですよ…」

この男がかの［茶道サークル］の指導者とは信じられないと
誰もが想像さえしないだろう。

清や未琴が誇る美形プラス陣…の才色兼備で知られていた。

燈輔さんと陣はオプションだが、それでも人気はある
ただ……、1サークルとして希望者の数に比べて、入会者が増えない原因ともいえるのが未南雲教授だ

未南雲教授は燈輔と旧知の関係を利用して妹の清に手を出して、
理事会とスポンサーのダブルクラッチに遭い、清に東京湾に沈められかけた。

「ところでだ……陣！
人生においての通過儀礼というヤツを経験して貰おう！」

そういうと陣が持ってきた小瓶からグラスにほんの少しだけ注いだ。

「鐵家秘伝の媚薬を分けてやろう！
気にするな、日頃の感謝だ」

陣は顔をしかめた。

「確かに、前に物品で感謝を表現してほしいとは言いましたけど・・・・・

怪し過ぎません？」

「あの燈輔が秘蔵だが、秘薬のアレって言ってたから間違いはないはずだ！」

グラスを傾けて、中のドロリとした液体（紫色）を見た陣は・・・・・

「未南雲教授も怖いんじゃないんですか？

明らかに非合法ドラッグの方が安全でしょ！」

「ふ・・・・そこでだ。

お前の落とした単位を一つ、献上してやっても構わない…」

怖いことは否定しないんだ

「それは違反に当たるんじゃないんですかっ！

バレたら、二人とも大学から追放されますよ。」

「何言ってんだ。

一応、教授の研究に協力した事実は変わりない。

バレても、俺たちのバックには鐵家がついてんだ！

もみ消してもらうさ（笑）」

ここまで来たら引き返せないと、陣はグラスに注がれた液体をグイッと飲み干した。

「不味い・・・・・・・おぇ」

「よっ、大将！良い飲みっぷりだ！！
どうだ？
何か変わったトコロはあるか？」

未南雲教授はレポート用紙を片手に、陣の人体実験を観ている。

「特には……変化ありませんね。
燈輔さんに騙されたんじゃないんですか？」

「そんなはずはない。
燈輔の追試を免除してやったんだからな」

未南雲教授、あなたは生徒を何だと思っているんですか？

「これ、何の薬なんですか？
聞くの忘れていましたけど・・・・・」

「聞いて、驚くな！
全人類の夢、“媚薬”つまり、惚れ薬だ。
ふふ、俺のカリスマ性に磨きをかけるにはこれしかないと思ってな。
燈輔の野郎に取引を持ちかけといたんだ」

陣は開いた口が閉じなかった。
もちろん、媚薬の存在にではなく、未南雲教授の阿呆な思考回路にだ。

「未南雲教授、あなたはロクな死に方しませんね……」

「安心しろ、もうあきらめてる。
おっ！効果が出始めたらしいぞ！？」

＊＊＊＊大学のカフェテラス＊＊＊＊

「だよね～！ジン君の鈍さには、もう耐えられないところまできてるよね。」

「あれは、あれでジンさんの良いところなんですよ。
第一、どこかの変態教授みたいにナンパとかしてきたら逆に気持ち悪いですよ」

と、清は顔を曇らせる。

「去年のこと、まだ引きずってるの？」

「あれを引きずれずにいられますか。
東京湾の後一歩のところまで追いつめたというのに、兄さんが止めるから・・・・・」

清は両手を白くなるまで、握りしめている

「いきなり、抱きついてくる変態が悪いんですよ。
アレが兄さんと知り合いなんて、自分の兄の交友関係を疑いましたわ。」

「まあ、わたしも少なからず、手を出されそうになったんだけど…未南雲教授の大腿骨にひび入れてやったらおさまったんだよね！」

未琴はカプチーノをぐぐっと飲み干すと、清と一緒に未南雲教授の悪態をついた。

『ガチャン』

フードを目深に被った男がいきなり、清と未琴の座るテーブルへとタックルをかました。

「「へ、変態っ！？」」

ずごーっと、男から距離をとる二人。

「ま、待ってくれ…話を聞いて．．．．」

「え？陣さんですか？
そのような格好で何をなさっているんですか！？」

清が恐る恐る尋ねてみると．．．．．

「あの教授に：飲まされた．．．クスリが…どうやら、悪い方向に転じちゃって．．．」

「あ！、わたし、知ってる！
実験で透明人間になっちゃうやつでしょ！！」

未琴が自慢げに答える。

「未琴・・・・それって、この前あった映画の話でしょ・・・・・。第一、透明人間になってないから」

「じゃあ、陣さんは何か変化されたんでしょうか・・・・・・」

「そうだよ！勿体ぶらずに見せちゃえばいいじゃない」

未琴が陣のフードを引っ剥がそうにすると・・・・

「おい！止めてくれ。
ほら、清も一緒にやらない！

あっ・・・・・」

ゆっくりとフードが下げられていく・・・

未琴が陣の頭を見る

清や他の生徒も見る・・・・

『ぶっ！！』

清が倒れた。

『『『『ぶばっ！！』』』』

他の生徒も同じように鼻血を吹き出し倒れた。
何人かは、倒れずにその場でこらえている。

「流石ジン君・・・・いきなり、わたしのドツボをついてくるなんて・・・・
狐耳なんて反則だわ…」

そう言う未琴も同じように、鼻血を滴らせている。

「そ、そうですよ。
狐耳は、反則技の範疇を超えてますよ・・・」

清がゆっくりと体を起こすと、他の生徒も動き出した。

「ジン君がいけないんだからね…
ジン君が卑怯な耳なんてつけるから…」

「え？」

突然、背中に何かがへばりついた。

そして、次々と増えていく…

「え？え？
未琴たんは急なおねむかな～？

それとも、腕がいっぱい生えてきちゃったかな…」
陣はあくまでも赤子を扱うようにゆっくりと、ゆっくりと離れようとする。
「残念ながら、逃がさないよ～ジンくーん！！」
「ゴメンね、神代さん」
「私たちのせいじゃないの」
どうやら、引っ付いてきたのは未琴だけではないらしい。
さっきまで、雑誌に夢中だったはずの先輩やそこに通りかかっただけの同級生の手のひらが、陣の背中に伸びている。
「ちょっといいかもと思ったけど…
これって、ただのホラー映画じゃん！！」
必死にもがき苦しむ陣だが、一向に減ろうとせず、むしろ増えたかもしれない。
特に、むき出しになってる狐耳はあっちにこっちに引っ張られて尋常じゃないほど痛い。
「お、がんばってんじゃねぇーか！
どうだ？人生で一番楽しい一時は？」
未南雲教授は二階のオープンスペースでノーパソをカチカチと叩いている。
頭上から余裕の表情を浮かべ、ニヤニヤしているのが何とも憎らし

い。

「未南雲教授！はやく助けてください。
解毒剤とか何とかあるんでしょ！」

「解毒剤って、毒じゃねぇんだからそんなのねぇけど。
一時間以内に、アルコールを摂取すればその狐耳は消えるらしい。」

すると、未南雲教授は缶ビールを放った。

「ま、ダメだったら、うちの研究室に置いてやるからな…」

「研究室って・・・あなたの実験動物（奴隷）になんてなるきありませんから！
あっ！缶ビールが・・・・」

右手を精一杯に伸ばしたつもりだったが、知らない女子生徒に弾かれ、近くの排水溝に落ちてしまった。

「ちっくしょーっ！！」

無念にも缶には小指ほどの傷が出来ていて、中のほとんどが流れ出ていた。

「悪いが、それ以外に酒は持ちあわせていないぞ。
悲しいぜ・・・・
俺の責任で、陣の人生を狂わしちまったんだからな。
安心しろ、お前の亡骸は研究室に飾っといてやるから」

未南雲教授、両手で目を濡ぐるのはいいけど、その引きつったように笑う口角は隠せてないですよ。

「未南雲、あんたもちょいと、理事室でホルマリン漬けになってもらうよ！！」

未南雲教授の後頭部に衝撃がハシった。

「テメェは天宮怜華っ！！
いったい、何のつもりだ！」

そこに立っていたのは酒瓶を逆手に持った天宮怜華と、ここの学生位に見えるほど若い、メガネの女性。

「怜華さん！！」

「おまたせ～、ジン。
ひとまず、これでも飲んどきな。」

怜華の右腕から、シュート回転のかかった小瓶が投げつけられた。

「あ、ありがとうございます！！」

陣はすぐさま、キャップをねじ切り、中身を飲み干した。
喉を焼き切る程のアルコールにむせながまらも、頭に手を伸ばした。

「消えてる！狐耳が消えた！！」

「「「「「「チッ…」」」」」」

清も含めた周りからは、女子とも思えないほどの舌打ちが聞こえた。

皆さん、少しは隠しましょうね・・・・

「せっかくの研究材料が・・・・」

未南雲教授は膝をついてまでうなだれている。

「さっ！お前はこっちに来るんだ！」

怜華は未南雲教授の襟首を掴むとそのまま引きずろうする。

「離せ、天宮怜華！
お前には関係無いはずだ。」

すると、怜華の後ろに控えていた眼鏡の女性が・・・・

「未南雲仙一。貴方を霊薬不法所持及び、大学内における騒ぎの原因分子として、拘束します。
貴方には黙秘権と弁護権は存在しないので御了承して下さい。」

「あン？黙れ根暗女！！」

『ブチっ』

眼鏡の女性は未南雲教の背後まで回り込むと・・・・

『ガキャン…バリバリ』

手にしている一升瓶を振り下ろすというより、
鉄球をスナップをきかせて叩きつけたといったほうがしっくりくるだろう。
一升瓶と人間の頭蓋骨ではどちらが硬いのかはしらないが、砕けたガラスまみれの未南雲教授は動かなくなった。

「癒伊＞ユイ＜・・・・・さすがのアタシでもそこまでできないわ・・・・」

「そうですか、深酔いした先輩に比べれば被害を最小限に御しましたが？」

怜華は首をうなだれて、

「いや、もういい…なんでもないわ・・・」

怜華は未南雲の亡骸をずるずると引きずっていった

「なんだかな…
結局、損すんのってボクなんだなうぐぁ！」

突然、陣は体をくの字に曲げてひざをつく。
「どうしたのジン君！」
「どうかいたしましたか！陣さん」
慌てて、近寄ろうとする清と未琴だったが
「来るなっ！」
陣の一声でビクリと体を縮こまる。
「いいか、できる限りボクから離れてくれ」
じわりじわりと歩を後退する清の足元に何かが転がっている。
よく見れば、陣が一気飲み酒の小瓶だ。
「マムシ酒？
効能：憔悴しきった肉体に活力と元気を与えます。
持続性に優れており、夜の生活にもバッチリ！
明るい未来設計を！
よ、夜の生活…」
清が顔を真っ赤にしてオロオロしていると、未琴が小瓶を奪って
「はっはーん！
前屈みでもじもじしていると思ったら、ジン君も男の子なんだね♪」
未琴のニヤリと笑うと清に何か耳打ちした。

すると、清はたちまち目をそらした。

屈辱だ・・・・・・

明らかに作為的だ

「うぅ…こんな落ちかよーーー」

陣の悲痛な叫びは理事室の怜華の耳にまで届いたという。

第九話　酒とクスリは程々に（後書き）

まとまらずにスミマセン。

このままだと、違う結末が！って感じだったんでキリマシタ。

次回はうまくいくように頑張ります！！

以上、三者面談で、小説家になりたいと言おうか迷った雪原でした。

どぅしょ・・・・・進学

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1906c/

居候狐

2010年10月9日01時37分発行